愛知教育大学教育臨床総合センター紀要
第3号，pp. 71～ 77（March, 2013）

社会的比較感情尺度の作成

― 上方比較と下方比較を包括した感情の検討 ―

神　谷　紗由美（愛知教育大学大学院教育学研究科）
石　田　靖　彦（愛知教育大学学校教育講座）

Construction of Social Comparison Affect Scale.

Sayumi KAMIYA (Graduate school of Education (Educational Psychology), Aichi University of Education)
Yasuhiko ISHIDA (Department of School Education (Psychology), Aichi University of Education)

要約　中学生になると，定期テストが実施されるようになり，否応なしに他者との比較を意識させられるようになる。他者と比較をした際，それをどのように感じ受け止めるのかによって，その後の学習行動は左右され，学習意欲や学業成績に及ぼす影響も異なってくると考えられる。そこで本研究では，中学校入学直後の1年生を対象とし，友人との比較場面におかれた際に抱く感情にはどのようなものがあるのか，社会的比較感情の個人差を測定することのできる尺度を作成することを目的とした。その結果，社会的比較における感情には，自己防衛的・自己卑下的原因帰属や下方比較における他者配慮といった，先行研究では挙げられていなかった感情があることが示唆された。また，上方比較，下方比較どちらにおいても，ポジティブな感情とネガティブな感情があることが明らかとなった。

Keywords：社会的比較，社会的比較感情，中学1年生

はじめに

Festinger（1954）は，人には自分のもつ意見や能力を評価しようとする動因があり，物理的・客観的手段を用いることができないときに，他者との比較を通して自己を評価することを指摘した。これを社会的比較過程理論という。社会的比較過程理論によれば，社会的比較には，自分と類似した他者との比較だけでなく，自分よりも劣った他者と比較を行う下方比較と，自分より優れた他者と比較を行う上方比較があるとされる。下方比較は，自分よりも劣った他者と比較することにより，自分自身の自己評価が高められる。一方，上方比較は，自分より優れた他者と比較することにより，自分自身をより向上させられると考えられている。

教育現場における社会的比較の調査によると，他者と何らかの比較を行っている人は6割を超えており（外山，1999），さらに比較の対象は，学業成績が最も高い値を占めていることが示されている（外山，1999；外山・伊藤，2001）。このことから，児童生徒は学業成績について他者との比較に対し，強い関心をもっていることがうかがわれる。本研究では，その中でも中学1年生を研究の対象とし検討していく。その理由として，社会的比較の頻度は児童期から青年期にかけて多く見られると示されていることが挙げられる（高田，1999）。また，中学生になると，定期テストが実施されるようになることに伴い，強制的に比較の場面におかれ，否応なしに他者との比較を意識させられることになる。そのように他者との比較が意識されやすくなる中学生のなかでも，中学1年生は今までそれほど友人との比較を行ってこなかったために，最も他者との比較の影響を受けやすいと考えられる。例えば，Benesse教育研究開発センターの調査（2004）によると，中学1年生は，学習面においての変化が著しく，学習に対する否定的意識が増大し，学習意欲の低下，学習目的の喪失，学習方法がわからないなど学習に対する悩みの増大がみられることが明らかにされている。これらのことから，中学1年生の段階は，学習にとっての大きなターニングポイントになると考えられる。学習面での意欲の低下をどう食い止めるかが大きな課題となっているといえよう。

さらに他者との比較による影響というものは一様ではなく，比較をした際に，それをどのように感じ受け止めるかによって，その後の学習行動は左右され，学習意欲や学業成績に及ぼす影響も異なってくると考えられる。外山（1999）は，上方比較の結果，意欲や友達への憧れというポジティブな感情を抱く者や，自己向上の努力というポジティブな行動につながる者がいる一方，友だちへの嫉妬や劣等感というネガティブな感情を抱く者や，努力の放棄や友だちへの攻撃というネガティブな行動につながる者がいることを示した。また外山（2009）は，上方比較をした際に，もっとが

んばろうといったポジティブな感情を抱き，学習に対して努力すると学業成績は向上するが，落ち込んだり相手に腹が立ったりといったネガティブな感情を抱き，学習を回避すると学業成績が低下することを示した。これらの研究から，同じ友人との比較であっても，そこで喚起される感情の違いによって，その後の学習行動が左右され，学習意欲や学業成績にも異なった影響を示すことが示唆される。このことから，中学１年生において，他者との比較が学習意欲や学業成績に及ぼす影響を検討する際には，比較の方向性（上方比較か下方比較か）だけでなく，比較の際にどのような感情を抱きやすいのかという感情の個人差についても検討する必要があると考えられる。しかしながら，先行研究においては，上方比較のみの感情を扱っており，下方比較については十分な検討が行われていない。そこで本研究では，下方比較をも含めた社会的比較感情について包括的に検討することとする。

本研究の目的は，中学校入学直後の１年生を対象とし，友人との比較場面におかれた際に抱く感情にはどのようなものがあるのか，社会的比較感情の個人差を測定することのできる尺度を作成することとする。

質問項目の収集と作成の手続き

１．自由記述による項目収集

社会的比較をした際に抱く感情（社会的比較感情）にはどのようなものがあるのかを，収集し整理することを目的として，自由記述による予備調査を行った。

＜方法＞

調査時期　2011年４月初旬に実施した。

調査協力者　Ａ県内の私営塾に通う中学生16名（男子７名，女子９名），高校生８名（男子３名，女子５名）の計24名（男子：10名，女子：14名）であった。

調査内容　社会的比較（上方比較と下方比較）の仮想場面を提示して実施した。社会的比較の仮想場面は外山（2009）と中山（1994）を参考にして作成した。教示文は「あなたにはＡ君（ちゃん）というとても仲の良い友達がいます。ある日，学校でテストがあり，次の日にテストが返ってきました。さっそく２人はいつものようにテストの見せ合いをしました。すると，Ａ君（ちゃん）はあなたよりも15点高い［低い］点数を取っていました。」である。そして，上方比較，下方比較それぞれ「あなたはその時，どのようなきもちになりましたか（どのように感じましたか）？」という質問に対して，自由記述を求めた。

＜結果と考察＞

自由記述で得られた回答を分類したところ，社会的比較感情には，先行研究（外山，1999；外山，2009など）では挙げられていなかった感情があることが示唆された（Table１）。下方比較で相手のことを気遣うなど相手に配慮する感情や，出た結果が自分の能力ではなく，別の要因にあると考えるなど原因帰属に基づく自己卑下や自己防衛である。本調査では，これらの感情をも含めた社会的比較感情を新たに追加し，検討することとした。

なお，予備調査では，教示文に比較対象のＡ君（ちゃん）が日頃自分とどの程度学業成績に差があるのかは示していなかった。しかしながら，普段自分よりも成績が上であるのか，同じくらいであるのか，下であるのか，というように，個人がどのように考えたかによって感情が異なることが調査対象者により指摘された。そのため本調査では，教示文に「あなたとＡ君（ちゃん）はいつもだいたい同じくらいの成績です」という文を加えることにした。また予備調査では，相手と自分の点数の差を15点としたが，中学生にとってはその差は大き過ぎることが調査対象者により指摘されたため，本調査では10点の差にすることにした。

Table１　予備調査回答例

上方比較	くやしい　次は絶対勝ちたい　負けたくない あの時はおなかが痛かった すごい　相手を目標にする 苦しい気持ちになる　絶望する　劣等感を感じる
下方比較	気まずい　素直に喜べない　複雑　すまない気持ち 相手のコンディションの悪さを察する 相手ではなくもっと上の人のことが気になる もっといい点を取りたい　また勝ちたい 優越感を感じる　うれしい　勝った 何も思わない

２．社会的比較感情のカテゴリー生成と項目の分類

予備調査で得られた回答に，これまで社会的比較感情を扱った研究で用いられた項目を加えて，社会的比較感情に関する項目プールを作成した。社会的比較感情として選定された項目は，宮原・吉良（2002）で用いられたライバルイメージの項目，外山（2000b）の社会的比較の結果の項目，外山（2006c）の社会的比較感情項目であった。これらの項目プールを筆者２名で協議しながらKJ法を用いて分類，整理した。

その結果，上方比較場面での社会的比較感情は，“意欲感情（自己向上）”，“意欲感情（自己目標）”，“憧憬感情”，“卑下感情”，“他者失敗”，“原因帰属”の６つの感情カテゴリーに分類し得ることが示された。また，下方比較場面での社会的比較感情は，“意欲感情（自己向上）”，“意欲感情（自己目標）”，“優越・安心感情”，“他者配慮”，“他者失敗”，“原因帰属”の６つの感情カテゴリーに分類し得ることが示された。

次に，各カテゴリーに分類された項目について表現の違いを修正統合し，各感情カテゴリーの項目数が同じ程度になるように統一した。最終的に，上方比較場面での社会的比較感情は，「Ａに負けてしまってくやしいと思う」など４項目からなる“意欲感情（自己向上）”，「自分は自分，他人は他人だと思う」など３項目からなる“意欲感情（自己目標）”，「Ａはすごいと思う」など３項目からなる“憧憬感情”，「劣等感を感じて落ち込む」など３項目からなる“卑下感情”，「Ａには次は失敗してほしいと思う」など３項目からなる“他者失敗”，「たまたま調子が悪かっただけだと思う」など３項目からなる“原因帰属”の計19項目を作成した。

下方比較場面での社会的比較感情は，「次のテストでも，Ａに勝てるように，がんばろうと思う」など３項目からなる“意欲感情（自己向上）”，「自分は自分，他人は他人だと思う」など３項目からなる“意欲感情（自己目標）”，「自分の方が勝ったと思って，優越感を感じる」など３項目からなる“優越・安心感情”，「Ａに申し訳なく思う」など３項目からなる“他者配慮”，「Ａに次も失敗してほしいと思う」など３項目からなる“他者失敗”，「たまたま調子が良かったのだと思う」など３項目からなる“原因帰属”の計18項目を作成した。

本調査

社会的比較感情の個人差を測定する尺度を作成することを目的とした。具体的には，前述で作成された質問項目を中学校入学直後の１年生を対象として実施し，因子分析を用いて検討する。

＜方法＞

調査時期　2011年５月中旬に実施した。

調査者協力者　Ａ県内の３つの公立中学校（全27クラス）の１年生890名に対し質問紙調査を行った。欠損値のあったものを除いた624名（男子322名，女子302名）を分析対象とした。

質問紙の構成

１．社会的比較場面の提示

社会的比較の仮想場面（上方比較の場面，下方比較の場面）は，外山（2009）の仮想場面，中山（1994）の仮想的状況を参考にして，イラストを用いた場面想定法を使用した。登場人物のイラスト（表情は描かれていない）と教示文が示されている。教示文は「あなたにはＡ君（ちゃん）というとても仲の良い友達がいます。あなたとＡ君（ちゃん）はいつもだいたい同じくらいの成績です。ある日，学校でテストがあり，次の日にテストが返ってきました。さっそく２人はいつものようにテストの見せ合いをしました。すると，Ａ君（ちゃん）はあなたよりも10点高い［低い］点数を取っていました。」である。

２．社会的比較感情の測定

前述で作成された質問項目（上方比較の場面：19項目，下方比較の場面：18項目）を用いた。回答方法は，「全く感じない（１）」「あまり感じない（２）」「少し感じる（３）」「とても感じる（４）」の４件法である。教示文は「あなたはどのように感じましたか？」である。

＜結果＞

１．上方比較場面での社会的感情項目の因子分析

社会的比較感情（上方比較）に関する19項目について，主因子法による因子分析を行い，固有値の減衰状況と因子の解釈可能性から６因子を抽出した。プロマックス回転後の因子負荷量をTable２に示す。

第Ⅰ因子には，「次のテストでは，Ａに負けたくないと思う」など４項目が高い負荷量を示しており，KJ法で分類された“意欲感情（自己向上）”に含まれる項目群から構成されていた。自分自身の目標ではなく，相手との比較を意識した意欲的な感情であることから，『他者比較に基づく意欲感情』と命名した。第Ⅱ因子には，「たまたま調子が悪かっただけだと思う」など３項目が高い負荷量を示しており，KJ法で分類された“原因帰属”に含まれる項目群から構成されていた。出た結果を自分の能力ではなく運や相手の出来に，自己防衛的に帰属させる感情であることから，『自己防衛的原因帰属』と命名した。第Ⅲ因子には，「Ａには次のテストでは，自分よりも下であってほしいと思う」など３項目が高い負荷量を示しており，KJ法で分類された“他者失敗”に含まれる項目群から構成されていた。相手の失敗を望む感情であることから，『他者失敗願望』と命名した。第Ⅳ因子には，「Ａを尊敬している」など３項目が高い負荷量を示しており，KJ法で分類された“憧憬感情”に含まれる項目群から構成されていた。相手を尊敬し，相手のようになりたいと憧れる感情であることから，『憧憬感情』と命名した。第Ⅴ因子には，「自分なんかだめだと思う」など３項目が高い負荷量を示しており，KJ法で分類された“卑下感情”に含まれる項目群から構成されていた。劣等感を感じ，自分はだめだと思う感情であることから，『劣等感情』と命名した。第Ⅵ因子には，「人と比較せず，自分の立てた目標を達成したいと思う」など２項目が高い負荷量を示しており，KJ法で分類された“意欲感情（自己目標）”に含まれる項目群から構成されていた。相手との比較ではなく，自

分自身の目標を重視した意欲的な感情であることから，『自己目標に基づく意欲感情』と命名した。

因子分析結果に基づき，各因子に.35以上の負荷量を示す項目で下位尺度を構成した。その際.35以下の低い負荷量を示す「自分は自分，他人は他人だと思う」という項目を除外した。各下位尺度のα係数は，他者比較に基づく意欲感情で.84，自己防衛的原因帰属で.77，他者失敗願望で.82，憧憬感情で.75，劣等感情で.62，自己目標に基づく意欲感情で.69であった。

2．下方比較場面での社会的比較感情項目の因子分析

社会的比較感情（下方比較）に関する18項目について，主因子法による因子分析を行い，固有値の減衰状況と因子の解釈可能性から６因子を抽出した。プロマックス回転後の因子負荷量をTable３に示す。

第Ⅰ因子には，「Ａに次も失敗してほしいと思う」など３項目が高い負荷量を示しており，KJ法で分類された“他者失敗”に含まれる項目群から構成されていた。相手の失敗を望む感情であることから，『他者失敗願望』と命名した。第Ⅱ因子には，「次のテストでも，Ａに勝てるようにがんばろうと思う」など３項目が高い負荷量を示しており，KJ法で分類された“意欲感情（自己向上）”に含まれる項目群から構成されていた。自分自身の目標ではなく，相手との比較を意識した意欲的な感情であることから，『他者比較に基づく意欲感情』と命名した。第Ⅲ因子には，「Ａに対して，気まずいと思う」など３項目が高い負荷量を示しており，KJ法で分類された“他者配慮”に含まれる項目群から構成されていた。相手のことを思い素直に喜べないなど，相手に配慮する感情であることから，『他者配慮』と命名した。第Ⅳ因子には，「たまたま調子が良かっただけだと思う」など３項目が高い負荷量を示しており，KJ法で分類された“原因帰属”に含まれる項目群から構成されていた。出た結果を自分の能力ではなく運や相手の出来に，自己卑下的に帰属させる感情であることから，『自己卑下的原因帰属』と命名した。第Ⅴ因子には，「重要なのは，勝ち負けではなく，自分のがんばりだと思う」など２項目が高い負荷量を示しており，KJ法で分類された“意欲感情（自己目標）”に含まれる項目群から構成されていた。相手との比較ではなく，自分自身の目標を重視した意欲的な感情であることから，『自己目標に基づく意欲感情』と命名した。第Ⅵ因子には，「自分はよくできると思って安心する」など２項目が高い負荷量を示しており，KJ法で分類された“優越・安心感情”に含まれる項目群から構成されていた。相手に勝っていることで，優越感や安心感を得ている感情であることから，『優越・安心感情』と命名した。

因子分析結果に基づき，各因子に.35以上の負荷量を示す項目で下位尺度を構成した。その際.35以下の低い負荷量を示す「自分は自分，他人は他人だと思う」という項目を除外した。また「Ａが自分より悪くてほっとする」という項目は『他者失敗願望』に分類されたが，上方比較の『他者失敗願望』の項目と対応を付けるため除外した。

各下位尺度のα係数は，他者失敗願望で.82，他者比較に基づく意欲感情で.85，他者配慮で.67，自己卑下的原因帰属で.63，自己目標に基づく意欲感情で.69，優越・安心感情で.55であった。『優越・安心感情』のα係数はやや低いが，人に勝って安心したり，優越感を感じたりすることはあると考えられるため，本研究ではそのまま採用することにした。

Table２　社会的比較感情（上方比較）の因子分析結果

	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ
他者比較に基づく意欲感情（α係数 .84）						
15 次のテストでは、Aに負けたくないと思う	**.84**	.07	−.04	−.02	.04	−.05
2 次のテストではAよりもよい点数を取りたいと思う	**.78**	.08	−.05	−.02	−.03	.01
5 次のテストではAに勝てるようにがんばろうと思う	**.75**	−.03	.00	.01	−.11	.14
7 Aに負けてしまってくやしいと思う	**.66**	−.07	.11	.04	.09	−.09
自己防衛的原因帰属（α係数 .77）						
4 たまたま調子が悪かっただけだと思う	.05	**.73**	.01	.04	−.08	.07
17 運が悪かったのだと思う	.01	**.70**	−.06	−.01	.13	−.09
9 たまたまAが良い点数を取ったのだと思う	.02	**.70**	.12	−.05	−.04	.03
他者失敗願望（α係数 .82）						
16 Aには次のテストでは、自分よりも下であってほしいと思う	.03	.06	**.79**	.05	−.06	−.10
1 Aにはこれ以上がんばってほしくないと思う	.03	−.05	**.77**	−.03	.04	.03
18 Aに次は失敗してほしいと思う	−.08	.08	**.70**	−.08	.06	.03
憧憬感情（α係数 .75）						
10 Aを尊敬している	−.08	−.03	.03	**.79**	−.07	.08
3 Aのようになりたいとあこがれる	.05	.02	.09	**.72**	−.02	−.03
13 Aはすごいと思う	.03	.01	−.20	**.62**	.12	−.06
劣等感情（α係数 .62）						
19 自分なんかだめだと思う	.04	−.06	−.06	−.08	**.86**	.02
8 Aにはどうせかなわないと思う	−.18	.10	.06	.08	**.44**	.02
14 劣等感を感じて落ち込む	.11	.00	.21	.13	**.41**	.05
自己目標に基づく意欲感情（α係数 .69）						
11 人と比較せず、自分の立てた目標を達成したいと思う	.03	−.10	.07	−.04	.03	**.83**
12 重要なのは、勝ち負けではなく、自分のがんばりだと思う	.05	.07	−.10	.05	.01	**.62**
6 自分は自分、他人は他人だと思う	−.17	.24	−.04	−.01	.05	.30

因子間相関	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ
Ⅰ		.06	.29	.29	.04	.38
Ⅱ			.56	−.11	.30	−.10
Ⅲ				−.18	.44	−.34
Ⅳ					.26	.23
Ⅴ						−.22
Ⅵ						

因子抽出法：主因子法、回転法：Kaiserの正規化を伴うﾌﾟﾛﾏｯｸｽ法

Table 3　社会的比較感情（下方比較）の因子分析結果

	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ
他者失敗願望（α係数 .82）						
1 Aに次も失敗してほしいと思う	.84	.00	−.03	.04	.01	−.13
15 Aにがんばってほしくないと思う	.82	−.14	.02	−.04	.04	.04
10 Aには次のテストでも、自分よりも下であってほしいと思う	.81	.09	.00	−.02	−.01	−.07
他者比較に基づく意欲感情（α係数 .85）						
4 次のテストでも、Aに勝てるようにがんばろうと思う	−.09	.84	.02	.01	.07	.01
3 次のテストでも、Aには負けたくないと思う	.04	.84	−.05	.03	−.05	−.04
11 次のテストでも、Aよりも良い点数を取りたいと思う	.03	.78	.02	−.04	−.01	.04
他者配慮（α係数 .67）						
16 Aに対して、気まずいと思う	.03	−.03	.84	−.05	−.03	.10
18 Aに申し訳なく思う	−.08	−.04	.58	.01	.01	.10
6 Aに悪いと思って、Aの前では素直に喜べない	.07	.06	.53	.05	.00	−.18
自己卑下的原因帰属（α係数 .63）						
9 たまたま調子が良かっただけだと思う	−.09	−.07	.02	.85	.02	.04
2 運が良かったのだと思う	.10	.10	−.06	.57	.00	.07
17 たまたまAが悪い点数を取ったのだと思う	.05	.03	.32	.37	−.02	−.12
自己目標に基づく意欲感情（α係数 .69）						
8 重要なのは、勝ち負けではなく、自分のがんばりだと思う	−.05	.05	.04	.02	.73	.01
12 人と比較せず、自分で立てた目標を達成したいと思う	.00	.04	.04	−.07	.67	.00
優越・安心感情（α係数 .55）						
5 自分は良くできると思って安心する	.00	−.03	.01	.05	.09	.64
14 自分のほうが勝ったと思って、優越感を感じる	.19	.14	.00	.00	−.11	.46
13 Aが自分よりも悪くてほっとする	.59	.02	.04	−.01	.03	.22
7 自分は自分、他人は他人だと思う	.13	−.10	−.16	.11	.33	.12
因子間相関	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ
Ⅰ		.33	−.07	.30	−.43	.59
Ⅱ			.02	.12	.04	.34
Ⅲ				.19	.22	−.04
Ⅳ					−.12	.23
Ⅴ						−.25
Ⅵ						

因子抽出法：主因子法、回転法：Kaiserの正規化を伴うﾌﾟﾛﾏｯｸｽ法

＜考察＞

中学校入学直後の１年生を対象とし，友人との比較場面におかれた際に抱く感情にはどのようなものがあるのか，社会的比較感情の個人差を測定することのできる尺度を作成することを目的とした。

本研究では，先行研究においては扱われていなかった下方比較における感情も含め，社会的比較における感情を包括的に検討した。その結果，出た結果を自分の能力ではなく運や相手の出来に帰属させるといった，自己防衛的原因帰属や自己卑下的原因帰属や，下方比較で相手のことを気遣うなど相手に配慮する感情など，社会的比較における感情には新たな感情があることが示唆された。

また，上方比較，下方比較どちらにおいても，ポジティブな感情とネガティブな感情の両方の感情があることが明らかとなった。ポジティブな感情としては，他者比較に基づく意欲感情や自己目標に基づく意欲感情など，ネガティブな感情としては劣等感情や他者失敗願望などが挙げられる。ポジティブな感情を抱くのか，ネガティブな感情を抱くのかによって，その後の学習行動は左右され，学習意欲や学業成績に及ぼす影響も異なってくると考えられる。このことから，中学１年生の他者との比較が学習意欲や学業成績に及ぼす影響を検討するには，比較の方向性（上方比較か下方比較か）だけでなく，比較の際にどのような感情を抱きやすいのかという感情の個人差についても検討する必要性があることが示唆されたといえよう。今後は，社会的比較が学習意欲や学業成績に及ぼす影響について，本研究で作成した社会的比較感情の尺度を用いて，感情の個人差をも含めた検討を行うこととする。それぞれの感情を抱きやすい生徒はその後どのような学習行動を行うのか，学習意欲や学業成績がどのように変化するのか，長期的な調査を行い検討したい。

引用文献

Benesse教育研究開発センター（2004）．第１回子ども生活実態基本調査報告書，p.123.

Festinger, L.（1954）．A theory of social comparison processes. *Human relations,* 7，117-140.

宮原里依子・吉良安之（2002）．対人関係としてのライバルに関する研究　―児童期後期を対象として―　九州大学心理学研究，3，137-143.

中山勘次郎（1994）．友人との社会的比較が達成への態度に及ぼす影響　上越教育大学研究紀要，14，53-65.

高田利武（1999）．日常事態における社会的比較と文化的自己観　―横断資料による発達的検討―　実験社会心理学，39，1-15.

外山美樹（1999）．児童における社会的比較の様態　筑波大学発達臨床心理学研究，11，69-75.

外山美樹（2006a）．社会的比較によって生じる感情や行動の発達的変化　―パーソナリティ特性との関連性に焦点を当てて―　パーソナリティ研究，15，1-12.

外山美樹（2006b）．社会的比較感情尺度および社会的比較対処行動尺度の作成　日本教育心理学会第48回総会発表論文集，34.

外山美樹（2009）．社会的比較が学業成績に影響を及ぼす因果プロセスの検討　―感情と行動を媒介にして―　パーソナリティ研究，17，168-181.

外山美樹・伊藤正哉（2001）．児童における社会的比較の様態（2）　―パーソナリティ要因の影響―　筑波大学発達臨床心理学研究，13，53-61.